神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

プクフからコルタカベサスへ：チアパスにおける他者イメージと暴力

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2005-03-29
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小林, 致広, Kobayashi, Munehiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1062

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

プクフからコルタカベサスへ
——チアパスにおける他者イメージと暴力——

小　林　致　広

はじめに

1997年12月末，チアパス高地チェナロォ地区アクテアル（Acteal）でミサ中の避難民の虐殺事件が起きた。被害者はラス・アベーハス（Las Abejas）というカトリック系市民組織の構成員で，死者45名の大半は女性と子供だった。証言によれば，襲撃者たちは「種まで一掃せよ」と叫びながら，女性の乳房を切り取り，股間に棒を突っ込み，腹から引き出した胎児をマチェーテで打ち合っていたという（Garza et al. 1998:31）。下手人は準軍事組織のマスカラ・ロハ（Mascara Roja）とされ，その拠点は地区内のロス・チョロス（Los Chorros）にあった。農園主追放で形成されたロス・チョロスは強力な力をもつ呪術師がいる村として知られていた（Hirales 1998:40）。

1995年２月の政府軍のサパティスタ管轄領域への侵攻と相前後して，チアパス州各地で準軍事組織が活動しはじめた。その頃から，チアパス高地では住民を襲撃し首を刎ねるコルタカベサス（cortacabezas，cortador de cabezas）に関する噂が広まっていた。チェナロォ地区の医療状況を調査していた人類学者フレイエルムートは，1995年６月頃，先住民のコルタカベサスがいるという噂を聴いたと報告している（Freyermuth 1998:68）。1996年８月には，リンチを受けた７名の若者の遺体がチェナロォ地区の街道脇の洞窟で発見される事件が発生した。1997年９月には，マホムート（Majomuto）の砂利採取の利権をめぐる衝突が起き，一部では，「サパティスタが死者を食べた」という報道が

された（*La República*, 22/9/1997）。

1996年2月に調印されたサンアンドレス合意の実行に消極的な連邦政府は，虐殺事件を共同体相互の対立，内部抗争ととらえ，「慣わしと習慣」に基づく先住民自治の危険性を強調するキャンペーンを展開した。1998年上期には，軍や州警察が反乱自治地区役場を襲撃する事態が起きる。コルタカベサスの噂の広がりは，地域の軍事化の進行と密接な関係をもつものと思われる。

本稿では，チアパス高地先住民社会の「人を驚かす存在」の伝承から，先住民社会における他者イメージの変遷と他者排除の論理を探り，1990年代後半のコルタカベサスをめぐる言説について解明することにしたい。本稿でコルタカベサス（cortacabezas，頭を切る人）として言及している存在はツォツィル語でフマクベ（jmakbe）と呼ばれている。ツォツィル語では，jは人を指す接頭辞，makは「閉じる，塞ぐ」，be は「道」なので，スペイン語ではタパカミーノ（tapacamino，道を塞ぐ人）と訳されている。追剥ぎ（asaltacamino），強盗（asaltante），野盗（bandido），無法者（forajido）とされることもある。

I. コルタカベサスの話の多義性

まず，1990年代前半に採録された話（cuento）を題材に，コルタカベサスがどのような存在として語られているかを明らかにする。次の「死者の声，フマクベのお話」（以下「フクマベの話」と記す）は，チアパス州北西部オストゥアカン地区（Ostuacan）のツォツィル系先住民が語ったものである。[(1)]

（1）「フクマベの話」

タン・オック（tan ok'，灰の足）と呼ばれるサンクリストバルの人は，アチェラルホ（ach'elal jo，泥と水）と呼ばれたラ・カンデアラリアの人と「道塞ぎ（jmak beetike）」の合戦をしていた。「灰の足」の側が不利となり，超自然的な力をもつトティク（totik，神の子）と呼ばれるベヌスティアーノ・

カランサ（以下V・カランサと表記）の人に支援を要請した。[2] 再び試合が始まると，「泥と水」の側に死者が出た。彼らは妖術師の「山の主（yajval vitze)」の援助を仰いだ。だが，祖母の背中にいた赤ん坊が動物の格好をした山の主が近づくのに気づき知らせた。祖母は教会の前で「道塞ぎ」の祭りをしていた超自然的な力をもつ12名に知らせた。彼らは動物を捕まえ，「泥と水」の村に追い返した。動物は巨大な牡牛になり，ミサ参列者たちを殺害した。

「泥と水」が敗北する様子を目の当たりにしたサンクリストバルの人は，「鉄で覆われた人間（jvilom tak'in vinike)」を呼び，郊外の鍾乳洞に配置した。彼こそがフマクベである。彼はサンクリストバルに向かう人の荷物を奪い，追い返し，抵抗するものを殺した。先祖の話では，この略奪と殺害を実行した人物は鳥のように翼があり空を飛ぶので，軍隊も捕捉できなかった。鉄で覆われた人間は空を飛びまわり，村の美女を捕まえた。飛来するフクマベから身を護るため，女性は頭に大きな籠（canasto）を載せることにしたという。

時代が移っても，政府もフマクベを捕まえられなかった。やがて，フクマベは，徒歩や駄獣で物資を運搬する人の荷物を取り上げる仕事（acaparador）を開始した。彼はお金持ちとなり，サンクリストバルの実力者になった。困った村人は先住民の神々と接触できる強力な力をもつ12名に相談した。12名はフマクベを退治することにした。一人はピフイ（pijuy）という鳥に変身し，フクマベの周囲を飛びまわり，腋，膝，肘，首などが弱点であることを知った。火男と雷男（chauk）の二人はサンクリストバルへと向かった。

フマクベは杖を振りかざし二人を打ち据えようとした。殺されるぐらいなら戦うとトティクは提案した。戦いの前，両者は煙草を一服することになった。トティクは火打石で上手に煙草に火をつけたが，フマクベは時間がかかった。トティクが吐き出した煙草の煙は雲となって動きだした。フマクベと火男のトティクは杖で殴り合いだし，発生した火花や火の玉はフマクベの頭部の隙間に侵入した。内側の服が燃えだし，フマクベはトティクに敗北した。

疲れたフマクベの提案で戦いは中断された。休憩後，もう一人の雷男のトティ

クと戦いが始まった。戦いの前，煙草の儀式を行なった。火をつけられず苛立ったフクマベは，「かかってこい。悪い呪術師（muj ak'chamel）[3]のトティクよ」と叫んだ。これを聴いたトティクは煙草をふかし雨雲を呼び寄せた。フマクベが「かかってこい」と叫んだ瞬間，雷が落ち，フクマベの首が刎ねられた。頭はサンクリストバル市長の机，心臓は海まで飛んでいったという。フクマベは頭部に石，腹に飼い葉を詰め生き返ろうとしたが，結局死んでしまった。

洞窟には翼のあるフマクベの子供がたくさんいた。子供や母親は命乞いをしたが，二人は全員を殺し，フマクベの一族は全滅した。一方，サンクリストバルの住民は親たちを失った悲しみにくれ，市長は親たちを殺害した下手人の逮捕を警察に命じた。何も知らずに町に入った二人のトティクは拘束され，公衆の面前でフマクベを退治した様子を披露することを求められた。サンクリストバルの先住民は，彼らが力の象徴の火を一撃でつける様子を見つめた。雷を鳴らすため雷男が帽子を掲げると，先住民は自分たちを解放してくれたことを感謝した。金貨を詰めた磁器を提出するものもいたが，主神の命令を実行しただけと，トティクはお金を受け取らなかった。以後，運搬業者が襲われなくなり，女性も籠を頭に載せなくなった（González Casanova 1998:69-85）。

（2）「フクマベ」に関する他のバージョン

1990年代に語られた上記の「フクマベの話（J）」と類似した内容の伝承は，1961年にV・カランサを調査したディアス・デ・サラスによって採録されている。V・カランサの人がトティクと呼ばれている理由を語った三バージョン（JA: 2月1日，JB: 2月25日，JC: 7月10日）は，相互に内容や登場人物は微妙にずれているが，「フクマベの話」と同じテーマを語っている。そのため，「フクマベの話」の分析に重要な手掛かりを与えてくれる。

たとえば，JAとJBでは，「フクマベの話」で言及されているラ・カンデラリアがコパナウァストラ（Copanaguastla）とされている（Díaz de Salas 1995:240, 405）。コパナウァストラは，サンクリストバル（植民地期はシウダー・

レアル Ciudad Real）についでドミニコ会士によって建設された町で，現在のV・カランサ地区の南東部低地に位置していた。ツェルタル系先住民が住んでいたが，1600年のペストで人口は激減し，カンデラリアの聖母もソコルテナンゴに移され，町は寂れた（Molina 1976:207-210）。このことから，「フクマベのお話」で語られている「灰の足」と「泥と水」の対立，「泥と水」の敗北の話は，1600年前後のコパナウァストラの盛衰を語るものと想定できる。

その直後，サンクリストバルにフクマベが登場することになる。この「鉄で覆われた人間」は甲冑姿のスペイン人兵士のイメージそのものである。一方，先祖の話によると，フクマベには鳥のような翼があり，空を飛んで女性たちを拉致したとされている。この語りの背景にスペイン人やラディーノなどの支配者による先住民女性への性的暴力があることは明白である。その後，フクマベは，チアパス高地の物資集散地であるサンクリストバルの入口で先住民が運んでくる物資を買いたたく独占業者に変っている。これはサンクリストバルのラディーノ商人の姿にほかならない。実際，「フクマベの話」では，フクマベがサンクリストバルの実力者になったとされている。

「フクマベの話」と1961年の三つのバージョンでは，同じ出来事でも細部の記述が微妙に異なっている。たとえば，襲来する敵を発見するのは，「フクマベの話」や JA，JB，JC では，すべて女性（祖母か母親）といっしょの子供とされている。しかし，敵の襲来時の状況（JB ではカーニバルの最中），危険を回避する方法（JB では雲で町を隠す）その後の対応（JA では一人の女性が拉致され，JB では女性が食べられる）は異なっている。

トティク自身や彼らが退治する相手（以下「悪漢」と表記）の特性も三つのバージョンでは異なっている。「フクマベの話」では12名のトティクのうち，実際に活躍するのは，ピフイという鳥に変身したもの，火男と雷男の三者である。一方，三つのバージョンにおけるトティクの記述は，JA では雷（rayo），旋風（torbellino），閃光（centella），蜂鳥に変身できるナゥアル（nagual），JB では鶏・蜂鳥，ハリケーン，雷，地震になる力をもつ老人（viejitos），JC

では，雲，雷，小鳥，雨になれる者となっている。これらがすべてナウァルと関連していることは明白である。殺人の罪で拘束されたトティクは，広場でナウァルの技を見せ，釈放される。JA や JC では，蜂鳥が偵察し，旋風が大きなオコーテ松を広場の中心に建て，雷が一撃でその木を倒し，閃光が悪漢の首を刎ねたなどと，具体的なパフォーマンスが記述されている。

「フクマベの話」では，「悪漢」はコパナウァストラの「山の主」とサンクリストバルの洞窟のフクマベの二種類となっている。しかし，ほかの三つのバージョンで言及されている「悪漢」は一種類である。JA ではテンタシオン（tentación）とされている。テンタシオンが何を指すかは不明だが，悪魔に対応するプクフ（pukuj）と考えられる。JB では，ビロミカル（bilomikal），つまりユダヤ人（judio）とされている。JC では，イカルまたはソンブレロン（sombrerón）とされている。これらのうち，プクフ，イカル，ソンブレロンは，チアパスの先住民社会ではよく知られた超自然的存在である。

これらの「悪漢」は，女性を拉致して食べるか，洞窟に閉じ込めて愛人としている。後者の場合，毎日，毎週，毎月といった頻度で子供が産まれ，「悪漢」の性的能力が異常に高いことが示唆される。「悪漢」が退治された後，洞窟にいた女や子供たちはトティクによって殺される。また，これらの「悪漢」が本拠としていた洞窟の場所は，サンクリストバル近郊[(4)]などとなっている。

「フクマベの話」やV・カランサのトティクに関する三つのバージョンは，英雄が異郷の地に赴き，邪悪な悪漢を退治し，誘拐された人を救出するというマヤの英雄神話の「魔物殺害譚（monster killing tales）」型に属し（Pickard 1986:102-103），以下の基本的特徴を見いだせる。「悪漢」を退治するトティックは，天空の世界の存在（雷，旋風，蜂鳥など）に由来するナウァルの力をもつ。一方，洞窟を根拠地とする「悪漢」は，超能力（変身，飛行，性的能力）を行使し，先住民から富(商品，女性)を奪う存在である。トティクと「悪漢」は，天空と地下世界という対構造のなかに位置づけられよう。

II. 人を驚かす地下世界の多様な存在

先に指摘した「悪漢」が備える特性は，チアパスで語られてきたいくつかの超自然的存在の特性とも符合する。V・カランサのトティクに関する四つのバージョンで登場する三種の「悪漢」，プクフ，イカル，ソンブレロンは，こうした超自然的存在の代表格である。EZLN副司令官マルコスも，山中で先住民同志から聴いた伝承に，ソンブレロン，ボタンとイカル，喋る守護聖人箱（cajita parlante），イシュパキンテ（ix'paquinté）などがあったと証言している（Gilley et al. 1995:134）。そのことはEZLN戦闘員フェデリコの次の証言でも裏づけることができる。

「山中でどう対処すべきかよくわからなかった。だが，地域ごとに異なったバージョンやニュアンスのあるソンブレロン，パキメ（paquimé），つまりシュパキンテ（xpaquinte）の話を聞くことはとても役に立った。…またヒツィル・バック（jitz'il bak）は空を飛ぶ骸骨，骨でできた箱（cajita de huesos）は自然を保護する眼に見えない力である。…最初はあまり関心がなかった。子供を驚かせるだけの話と思っていた。やがて，それらの話が山中での不思議な生活の一部を構成し，重要な意味をもつことに気づいてからは，山，自然，大地という守護者とともに暮らす村人の生活を表現しているものとして，それらの話を聞くようになった（Ímaz 2003:136-137）」

（1） 人を驚かす地下世界の多様な存在

先の証言にあるソンブレロン，イカル，シュパキンテなどは，「人を驚かす存在（espantagentes）」としてチアパスの伝承に登場する。これに関して，チェナロォ地区ヤブテクルム（Yabteklum）の情報提供者L・Vは，シモホベル（Simojovel）地区出身の母から聞いた次のような話を紹介している。

人間界と隔たった大きな山中で，「人を驚かす存在」の代表選出会議が開かれた。イカル（negron, j-ik'ale），羊姿男（carnero, tentzune），長髪女（mujer peluda, che'tjole），ソンブレロン（jsmet pixole），シュパキンテ（duende, xpak'inte'）などが出席した。ソンブレロンが議長，長髪女が書記となって，会議は始まった。誰もが得意技を自慢気に披露し，自分が代表にふさわしいと言い張ったので，会議は混乱した。それ以降，人を驚かす存在は共同ではなく単独で人を驚かしだした（Pérez López 1997:107-113）。

これらの「人を驚かす存在」の大部分は，チアパス高地の先住民の世界観では，地下世界，あるいは死の神々に関連して言及されることが多い。超自然的存在の相互の序列関係は明確ではないが，チアパス高地の先住民社会に関する民族誌をひもとけば，それらの相互の関係をある程度整理できる。

1950年代後半から1960年代初頭，先住民族ツォツィルの居住するサンアンドレス地区を調査したホランド（William Holland R.）によると，地下世界を意味しているオロンテッィク（olontik）は死者の世界とされ，一般に悪魔と訳されるプクフ（pukuj）が居住している。この死者の神々はいろんな形で人間世界に出現する。具体的には，イカル，ソンブレロン，シュパキンテのほか，ワラパトック（walapatok，後向き足），ナティキホル（natikijol，長髪男），メチャメル（me'chamel，病気の母），バレム・ベケルト（yalem bek'elt，骸骨），キツィル・バック（kitsil bak，騒音を立てる骨）などが挙げられている（Holland 1989:96,127-130）。

一方，1970年代末に先住民族トホラバルの居住するラス・マルガリータス地区を調査したルスも，似た考え方があることを確認している。トホラバルの世界観では，世界は神々の世界（sat k'inal），人間の世界（lum k'inal），悪魔の世界（k'in k'inal）の三つで構成され，最下層の地下世界は大小のプクフ（niwan pukuj/ ch'in pukuj）が居住する空間とされる（Ruz 1990:66）。このプクフは，呪術師（pukuj）としてだけでなく，超自然的存在としても人間の

世界に登場する。それらは水の空間と山の空間に出没するものに分けられる。山を本拠とするものとしては，パキンタフ（pajkintaj，松の切り株に座り，男を誘惑する女），キック・ウィニック（k'ik' winik，黒い小人），ネフケル・ツィ（nejkel tz'i，長髪男）などがある（Ruz 1990:62-63）。

上記の二地区におけるプクフと「人を驚かせる存在」の関係はきわめてよく似ている。従来，プクフはキリスト教の神に敵対する悪魔（demonio）とされてきたが，本来は地下世界の死の世界を司る神々と考えるべきだろう。イカルは「黒い人」（señor negro）という意味で，ツェルタル居住域ではイカル・アハウ（ikal ahau）という神が崇拝されていたとする植民地時代の記録もある。[(5)] また，チアパス高地のカーニバルなどの祝祭において，イカルは重要な役回りを果たしている（Blaffer 1973; Bricker 1973:150-152）。また，V・カランサの事例JCのように，イカルはソンブレロンと同一視されることもある。この三者に関する民族誌や伝承の記述は混同されることが多い。

以下，チアパス高地の先住民族社会の伝承で，プクフ，イカル，ソンブレロンがどう語られているかを検討する。

（2） プクフ，地下世界の主？

チアパス高地の先住民言語でプクフ（pukuj，pucuh）と呼ばれる超自然的存在は一般には悪魔（demonio，diablo）とされ，悪魔の手先である呪術師（brujo）を指すこともある。「悪いプクフ（mu pukuj）」という表現があり，キリスト教的バイアスのある悪魔より，地下世界の死者の神とするほうが本来の意味に近いといえよう。ホランドが採録した祈りの言葉では，悪魔はリアポ（riapo）という言葉で表現されている（Holland 1989:140）。

事例 PA: ウィスタン地区サンペドロ・ペドレナル（San Pedro Pedrenal）。

マパステペック（Mapastepec）への道路が建設された頃，プクフが出没し，夜に出歩くことは恐れられていた。ある日，父親がビールを飲みすぎ，両親は帰宅できなくなり，子供たちは怯えていた。真夜中，叫び声が近づき，毛だら

けのプクフの姿を見た子供たちは家に駆け込んだ。姉は屋根裏に逃げたが，弟は食べられた。翌朝，両親は知事にプクフの退治を要請した。指揮官と兵士が派遣され，罠が仕掛けられた。真夜中，父親を待ちわびて叫ぶ姉の声を聞いてプクフがきた。姉は頑丈な箱の中に逃れ，プクフの捕獲に成功した。

尋問の結果，次のことが判明した。このプクフはタパチュラ（Tapachula）方面に向かう道路の脇にある三つ頂きのある丘（Tres Picos）[(6)]に住んでいた。州都からタパチュラに向かう国際道路が建設され，彼らの住居が壊され，仲間は死んだ。家を失い，森の洞窟に住み，アルマジロを食べるのに馴れたが，食料が不足すると子供を食べた。知事の命令で，プクフを木に縛り発砲したが，プクフは死ななかった。ドラム缶二つ分のガソリンを撒き，三つのドラム缶をプクフの周囲において爆殺した（Pérez López 1997:265-288）。

事例 PB:チャムーラ地区

ゴッセンが編集したチャムーラ地区の『創世記』にはプクフの話が多く所収されている。興味深いことに話に登場するプクフは絵入で紹介されている。

事例 PB1（テクスト33):峡谷の洞窟の人殺し（smilvan）のプクフ。

プクフはマチェーテで通りがかりの人を殺し，グアテマラに運び，食べていた。プクフを退治するため，火，旋風，スズメバチという「強い魂（tzotzik sch'ulel)」をもつチャムーラの三人が派遣された。プクフはマチェーテを振りかざし三人に飛びかかった。三人は攻撃をかわし，杖（?ak'te?, bastón）でプクフを打ち据えた。三人はプクフをバラバラにし，遺体を焼却した。

その後，プクフの棲家の洞窟に行ったが，ジャガーとコヨーテしかいなかった。そのまま進むと，グアテマラ総督のいる所に着いた。総督は，彼らが退治したのは自分の子供だったと告げ，三名を拘束した。しかし，収監された三名は何度も脱走し，火あぶりにしても死ななかった。結局，総督の配下の兵士は全滅した。総督が自分たちの仲間を襲撃し殺害することを止めると文書で確約

したので，三名は殺した兵士を生き返らした。総督の提供するお金を受け取らず，三名は帰郷した（Gossen 2002:414-431）。

事例 PB2（テクスト39）: プクフに拉致された女性。

早朝，トウモロコシをすりおろしていた女性の姿が見えなくなった。洞窟などを探したが見つからなかった。一月後，不意に妻は帰ってきた。当初，口をきけなかった妻は，薬草で話せるようになり，事情を話した。

プクフには翼があり，食料はセシーナ，燃料は松，ベッドで食事するという奇妙な習慣をもっていた。プクフに犯された女性は三週間後に男児を出産した。急速に成長した男児は，プクフが森に散歩に出かけた隙に岩を取り除き，母親を解放した。男児はプクフに食べられ，帰った女性もやがて亡くなった（Gossen 2002:508-527）。

事例 PB3（テクスト46）: 洞窟のプクフを退治したチャムーラ商人。

サンクリストバルからトゥストラに向かう道路にある「鐘の洞窟」付近で，プクフが旅人を襲撃する事件が頻繁に起きていた。翼のあるプクフは剣を持って崖の上から二人の行商人を襲撃した。しかし，棍棒と斧を持つ二人は，地面に十字を記し襲撃をかわし，プクフを倒した。二人はプクフの死体を切り刻み，頭と心臓を持ってチアパ・デ・コルソに向かった。さらに州都では知事も彼らの手柄を賞賛した（Gossen 2002:643-666）。

事例 PB4（テクスト48）: 金持ちになろうとプクフと契約を結んだ男。

一人の男が道であったプクフにお金が欲しいと申し出た。プクフは，百年後に男を呼び出すと告げて，お金が詰まった袋を渡した。しかし，サンクリストバルで逢った知り合いが，プクフの借金返済の期間は百日であると教えてくれた。妻がひどい裂傷を負ったという芝居を打ち，百日後に債権回収に来たプクフを騙し，借金を返さなくてもよくなった（Gossen 2002:671-696）。

以上の諸事例で語られるプクフのイメージは共通する側面もあるが，異なっている点も多い。PB1 や PB3 では，道で人を襲うフクマベの特徴が明白である。また，「魔物殺害譚」型の典型といえる事例 PB1 では，プクフを退治したチャムーラの三名がナウァルの力を持つこと，人を拉致して食べるプクフの正体がグアテマラ総督の息子とされている。[7] 一方，PB2 では性的能力に卓越し，女性に多くの子供を産ますことが語られている。また，PB4 においては，プクフが無尽蔵の富をもつ存在として語られている。

事例 PB3 の「鐘の洞窟」にいる人々に危害を加える超自然的存在の話は，チャムーラの『創世記』のテクスト73でも言及されている。それによると，1950年代末にパンアメリカン道路が建設された際，土地の「大地の主」が人間の犠牲を求めたという。「大地の主」が大声を出すと発破が爆発し，岩が崩れ多くの人が死んだ。「鐘の洞窟」のトチ（Toch）と称する「大地の主」は，工事関係者の半分を生贄とするよう建設技師に要求した。しかし，村人が同意しなかったので，道路は「大地の主」の住んでいた洞窟を迂回することになった。しかし，トチは車が通るのが気に入らず，時々，バス事故を起こし，犠牲者を洞窟に拉致し，自分の奴隷にするという（Gossen 2002:975-982）。

この「鐘の洞窟」にいる「大地の主」を事例 PB3 のプクフと同一の存在とみなすのは，少しばかり無理があるだろう。テクスト73では，「大地の主」がツォツィル語でアンヘル（anjel），つまり悪魔の対極の名前でよばれている。「大地の主」はツォツィル語でヤフバル・バナミル（yajval banamil）で，その表現形態がアンヘルとされ，容貌はラディーノに似ているという（Gossen 2002:1031,1049）。しかし，このテクスト73の事例や事例PAのプクフの正体が「大地の主」だったことは明白である。これらの「大地の主」は，洞窟を住処として，人間を拉致するが，拉致した女性に子供をつくらせることはない。

これらのテクストに添えられたイラスト群（図１参照）には興味深いものがある。そこで描かれているプクフの顔つきは，先住民（PB2），白人（PB3），グリンゴ（PB4）となっている。また，プクフの攻撃から身を護る方法[8]を語っ

たテクスト49では，本文ではラディーノ（jkaxlan）に似ているとされながら，図像では黒人として描かれている（Gossen 2002:697-704）。

事例 PB2 と PB3 では空を飛ぶことが明示され，事例 PB4 とテクスト49では先住民と交渉する姿が描かれている。これらに共通するのは，形状は異なるが目立つ帽子をかぶっていることである。これで想起されるのは，「フクマベの話」のトティクも大きな帽子をかぶっていたことである。また，第Ⅵ章で紹介するソンブレロンはソコヌスコの「大地の主」として語られている。善悪は別として，大きな帽子は強大な力を象徴していると推測できよう。

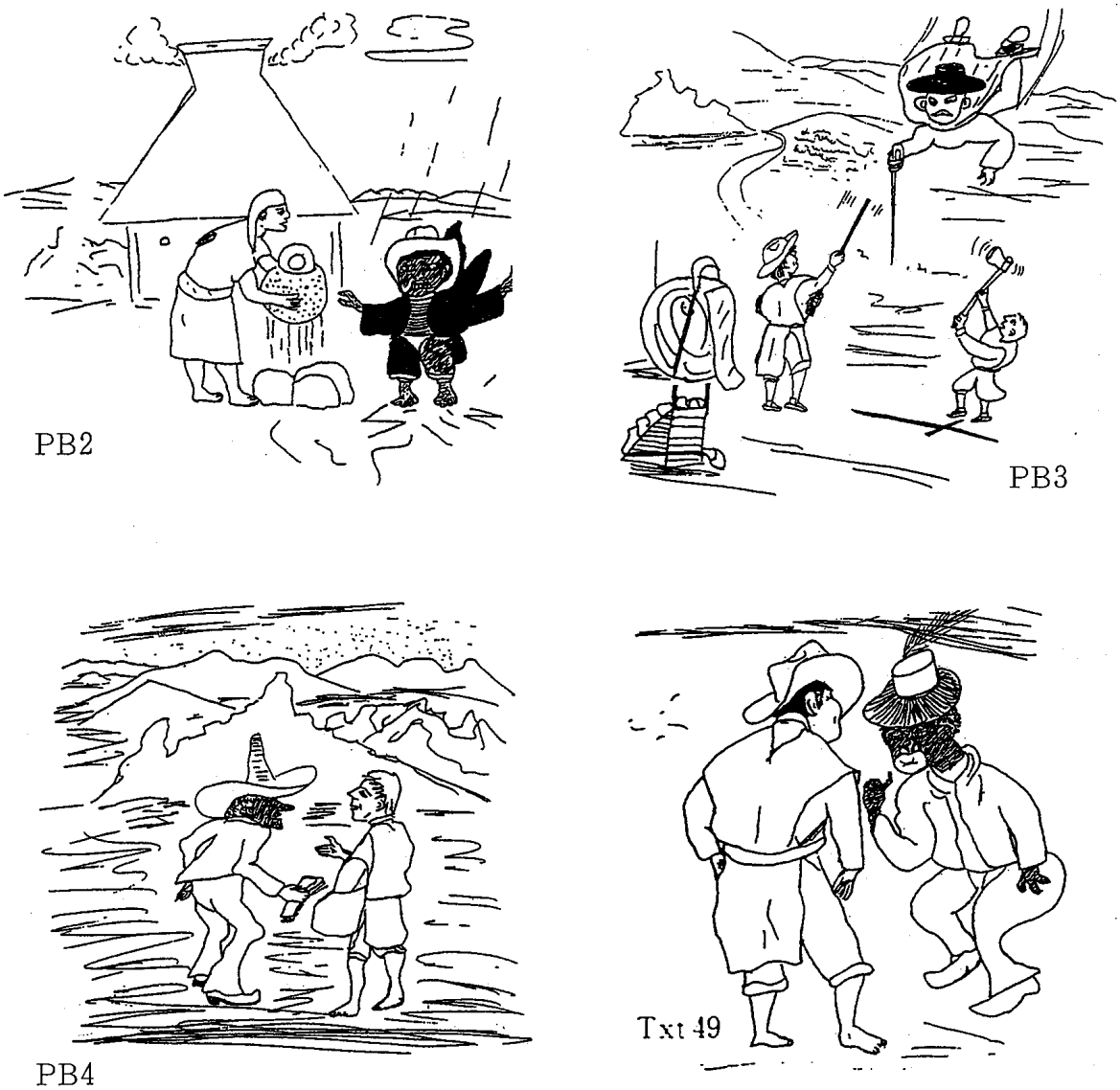

図1　プクワの図像　出典：Gossen 2002

III. イカル，畏怖される黒き存在

ツォツィル語やツェルタル語でイカル（ik'al, j-ik'al），トホラバル語でキク・ウィニック（k'ik' winik）と呼ばれる存在は，黒い人（señor negro, negrito）と訳されてきた。このイカルは，マヤのコウモリの神を起源とし，性，血，生贄，死と結びつき，洞窟に居住する黒い肌の大地の主であるとされる（Blaffer 1972:57-67)。イカルのイメージに関する総体的な記述は，サンアンドレスを調査したホランドによって提供されている。

事例 IA:サンアンドレス地区

イカルは4・5歳の子供の大きさで，黒いズボン，シャツ，靴，幅広の帽子というラディーノ風の服装だが，服は汚く烏のような臭いを発する。ふつうは山の洞窟に住むが，サンクリストバル市のサント・ドミンゴ教会の尖塔，チャムーラの教会にもいるといわれる。イカルは夜に洞窟から出て活動する。雨季には雲や霧で姿が見えにくく，昼も活動する。暴風が襲来し気候不順な10・11月，火曜と木曜，祝祭日に活動は活発になるという。

イカルは先住民の頭を好んで食べる。イカルは人間を拉致し洞窟まで運ぶ。男の場合は，死体を食べたり，頭や骨を家や橋，公共施設の建設者に売却したりする。セメントに頭を混ぜると頑丈になり，構造物が壊れないからである。一方，女性の頭は鐘の音をよくするために使われることもあるが，拉致された女性はイカルの妻となり，子供を産むことになるのが一般的である。黒い肌の子供は急成長し，洞窟内を飛び回るという(Holland 1989:125-127)。

事例 IB:チェナロォ地区

昔，イカル（j-ik'al）やボサボサ髪の妖怪（jnatikili jole），大鷲（muk'ta xik）などが人を拉致していたので，人の数が増えなかった。イカルが悪戯や暴行をするので，女性は水や薪を集めに行けず，家に一人でおれなかった。洞

窟や山に住むイカルは，夜に天井から家に侵入した。食事を提供してもらった後，首を布切れで縛って肩に担いで帰った。女は自分の女性にし，男は首を刎ね，橋や巨大な邸宅を建設している人に売っていた。

ある時，ある女性が拉致されイカルの女になった。女性が逃げないように，洞窟の入口に大きな石が置かれた。生まれた子供は急速に成長し，父親のように黒い顔になった。イカルは毎日肉を運んだが，悲しさのあまり女は何も食べなかった。母親の気持ちを察した子供は，イカルの留守中，石を取り除いた。女性は洞窟から脱出し家に帰ったが，生きる気力を失い，死んでしまった。

親たちは，自分のナウァルである山猫や梟やミミズクと協力して，これらの妖怪と戦ったが，勝てなかった。最後に小さな蜂鳥（tz'unune）がボサボサ髪の妖怪と戦った。蜂鳥が先に飛びあがった妖怪の肛門を突き刺すと，妖怪は墜落死した。イカルと大鷲も同じ運命をたどった（Arias 1990:69-71）。

事例 IC:チャムーラ地区

ゴッセン編集のチャムーラ地区の『創世記』には，奇妙なことにイカルが登場しない。しかし，出版された『ネグロ・シマロン』の話があるように，チャムーラ地区でもイカルの伝承は存在する。イカルがネグロ・シマロン[(9)]と訳された背景には，イカルが意味する「黒い人」が植民地期にチアパスにいた黒人奴隷と関連させて理解されたからと思われる。粗筋は以下のとおりである。

ある夜，ある女性が小用のため家の外に出たとたん，大きなソピローテの姿をした黒い顔のものが現れた。彼女は大きな布で包み込まれ，洞窟に運ばれた。黒い顔のものは，悪魔（pukuj）ではなくイカルだと名乗った。生肉しか食べないイカルは，女性の食物を調達するため夜ごと出かけた。やがて，女性は妊娠し，3日後に黒い肌の子供が誕生した。子供は急成長し，両親の容貌が違う理由を母親に尋ねた。家に帰りたいという母親の気持ちを理解した子供は，母親がマンゴなど熱帯性果物を食べたがっているとイカルに知らせた。

イカルは調達に3日かかると言い残して出かけた。その後，入口の岩を梃子

で動かし，子供と母親は脱出した。3日も歩いて戻った家に夫の姿はなかった。娘の失踪に気づいた母親が訴えたので，夫は妻殺しの容疑で収監されていた。釈放された夫に事の顛末を説明したが，夫は無言で実家に帰った。二人がいないことに気づいたイカルは子供を取り戻した。女性は3日後に亡くなった。

子供は母親の死を嘆き，悪事を働くイカルを撲滅することを決意した。イカルの子供に退治され，イカルはほとんどいなくなった。生き残ったイカルはアフリカに逃亡した。現在，チャムーラで見かけるイカルは，先祖たちの故郷を懐かしむために来訪している（Gómez y Gómez 2000）。

事例 ID:シナカンタン地区

イカルは，ラフリン（Robert M. Laughlin）とカラシック（Carol Karasik）の編集したシナカンタン地区の伝説集のスペイン語版ではシマロン（cimarrón, 逃亡黒人奴隷），英語版ではスプーク（spook，幽霊）とされている（Laughlin y Karasik 1992）。ここでは次の2例を紹介する。

事例 ID1:トニック・コンツァレス（Tonik Konzares）談。

かつては多くのシマロンがいて，鶏や金を盗み，女性を拉致した。人々は午後3時から翌朝8時まで家に閉じ篭っていた。朝9時からは外出できたが，一人では外出せず，暗い林を通るため水汲みや柴刈りはできなかった。

ある日，盗んだ七面鳥をもったシマロンが隣人の家を訪ね，食事を乞った。家の妻はポソーレを飲んでいるシマロンに熱湯をかけた。火傷したシマロンは回復し，3日後，今度は赤ん坊を捕まえようとした。女性たちはまとまって対抗した。家の女性は食事がほしいというシマロンに食事を提供し，隠れていた女性たちはコーヒーを飲んでいるシマロンに発砲した。シマロンは死なず，マチェーテで切断したが，シマロンは体を縫って生き返った。

2週間後，シマロンがやってきた。家の女性はシマロンを招き入れ，いっしょに食事をした。シマロンと子供たちが食事している最中，他の女たちは槍の先

を尖らした。食事を終えたシマロンが立ち上がって出て行こうとした瞬間，尖った槍を尻に突き刺し，口まで貫通させた。女たちはシマロンを串刺しのまま丸焼きした。8本の丸太でシマロンを炙った後，ランプ油を注ぎ，シマロンを焼殺した。現在，シマロンはほとんど姿をみないが，道路や橋を建設している所では，シマロンが話題になる（Laughlin y Karasik 1992:265-268)。

事例 ID 2:フン・バスキス（Xun Vaskis）談。

日暮れ前，チャムーラの男が道でシマロンに出会った。シマロンはチャムーラの男に戦いを挑んだ。チャムーラの男はシマロンを打ち据え，シマロンの膝の後ろ側にある長い黄色の金属製の翼をもぎ取った。翼を膝につければ空を飛べると，チャムーラの男は考えた。2回失敗したが，3度目はうまく飛べた。チャムーラの男は南のシマロンの土地まで飛んでいった。シマロンの両親が息子の所在について尋ねたので，自分の家で卵を与えちゃんと食事をさせていると答えた。両親はセシーナを男に渡し，半分を道中で食べ，残りを息子に食べさせるように頼んだ。さらに，両親は息子のお金のありかを尋ねたが，チャムーラの男はとぼけた。お金を運ぶと錆びてしまうと判断した男は，シマロンの財布にあった数千ペソを埋めていたのである。シマロンの両親は息子の翼を置いていくように頼んだが，チャムーラの男は持ち帰った。しかし，翼は男の膝につかず，チャムーラに帰るまで何日もかかった。しかし，埋めていたお金を取り出しに行くことができた（Laughlin & Karasik 1992:331-332)。

事例 IE:チロン地区サンヘロニモ・トゥリルハ

チアパス高地にイカルがきたとき，サンクリストバル市の人々は夕方以降の外出を避けた。遠出すると殺されるので商人は外出を控えた。荷物を運ぶ人は，馬や荷物もろとも姿を消した。イカルは人を殺すだけでなく，女性を捕まえ暴行し，洞窟に連行した。夜の闇に乗じて商店の商品を強奪した。

このイカルを退治するため，バチャホン（Bachajón）の勇敢な二人の男が

出かけた。山麓で出会った二人のイカルは彼らに勝負を挑んだ。二人の男は，挨拶の抱擁をしてから，勝負しようと提案した。ひとりがイカルの一人を抱きしめたまま，空中に飛び上がり，いち早く着地して，素早くイカルをマチェーテで殺害した。そして，仲間に逃げろと言い，逃げる仲間を追いかけたもう一人のイカルを背後からマチェーテで殺害した。

殺人罪でサンクリストバル市の牢獄に収監されるはずだったが，バチャホンの男二人は報奨金を受け取った。さらに，洞窟にいるカシュランの女性の救出を依頼された。二人の男はイカルが一日中飲み明かしている日曜日に洞窟に行き，子供と残った女性を除き，全員を救出した。洞窟から出たとたん，「雷と旋風の男（chawuk sok laj sutoik'）」が洞窟を焼き尽くした。脱出した女性の大半は妊娠しており，褐色の肌の子どもが生まれた。

イカルがきたせいで，メキシコ全土やチアパス高地でこうした事態が生じた。だが，強いバチャホンのツェルタル人の功績で，チアパス高地からイカルがいなくなった（González Casanova 1998:135-145）。

事例 IF:テネハパ地区

昔，われわれの集落は山の森の中にあった。森にいる悪いネグリートは生まれたての赤ん坊を奪おうとやってきた。だから，子供が泣くとネグリートが略奪にくるので，家族がいっしょに暮らすのは危険だった。ある時，赤ん坊が泣いていたが，両親は気づかなかった。ネグリートは板塀の隙間から侵入し赤ん坊を奪った。翌朝，母親は子供がいないのに気づいた。しばらくして，近所でも赤ん坊が生まれた。その母親はいつも赤ん坊を背負い，夫といっしょにいた。ある晩，ネグリートが訪れ，暖かい部屋に入らせてほしいと言った。夫婦は彼を部屋に招き入れ，ネグリートが所望した七面鳥の料理を準備した。夫は七面鳥ではなくネグリートを沸騰する湯に放り込んだ。ネグリートは顔や腹，肛門まで火傷した。ネグリートは洞窟へ飛んで帰ろうとしたが，5メートル前で捕まり，肛門を焼かれ，火傷で亡くなった（anónimo 1994:133-135）。

事例 IG:オシュチュック地区

1940年代前半，ツェルタル系のこの村落を調査したビジャ・ロハスのフィールド・ノートには，イカルに関する事例がいくつか記されている。地域のラディーノはイカルをネグロ・シマロン（negro cimarrrón）と呼んでいた。

事例 IG1:1942年12月14日

セバスティアンが先週から行方不明になった。酒を飲みすぎ，チャムーラの人間に襲われたという説，呪術師の仕業とする説のほか，イカルの仕業とする意見があった。それによると，身長50cm で黒い肌のイカルは，一人でいるインディオを探しているという。捕まえたインディオをラディーノの石工や建築業者に売り渡すためである。拉致された男は，教会，役場，橋などの基礎を強固にするため生き埋めにされるという（Villa Rojas 1990:376-378)。

事例 IG2:1944年 3 月21日

ある少年が言葉をうまく話せないのはイカルに拉致されたからである。イカルは神父のような黒衣をまとっていて，小さなラディーノに似ている。11月30日のサンアンドレスの日によく現れるので，出歩かないことにしている。

テマスカルに入っていた両親は入口を閉めるように少年に頼むが，そのとき大きな悲鳴がした。表に少年の姿はなく，両親や隣人は行方を探した。二日後，少年は呆然とした姿で帰ってきた。

少年の説明によると，突然現れたイカルに腰紐を捕まれ，近くの洞窟に連れて行かれたという。しかし，洞窟は，隣接するカンクック（Cancúc）の呪術師たちのナウァルが定期的に集まる場所だった。ナウァルはイカルに気づき火炎の輪で包囲したが，イカルは飛んで脱出した。ナウァルは，「お前はまだ死ぬときではない」と諭し，少年を帰宅させた。ショックで少年は言葉が少なくなった（Villa Rojas 1990:425-426)。

事例 IG3:1994年3月24日

雨の降る夕方，ビセンテと妻はテマスカルに入っていた。妻は先に出た夫にスカートを渡すように頼んだが，返事がなかった。夫は夜になっても現れなかった。女と逢っているのだろうと，妻は気に止めなかった。数日しても現れないので，コーヒー農園の出稼ぎ労働者リストを調べたが，彼の名はなかった。1週間後，青白い顔をしたビセンテが100ペソをもって帰ってきた。

ことの経緯は次のとおりである。テマスカルから出たとたんイカルに拉致された。イカルは彼を抱えて南に飛行したが，アマテナンゴ上空で，火のナウァルをもつ呪術師たちに進路を妨害された。呪術師たちはイカルの腋と股間を炎で焼いた。鋼鉄の衣服でも鉄で覆われていない部分は弱かった。墜落したイカルは，旅人から奪った400ペソをもっていた。呪術師は取り分を除いた100ペソをビセンテに与えた。彼は徒歩で帰路に着いた（Villa Rojas 1990:619-621)。

上記の事例から，イカルの基本的な活動は，人を襲撃し，人間を拉致し，財産を奪うことといえよう。拉致された人の運命は，殺害され身体が利用される場合と，洞窟で共同生活をする場合にわかれる。男性の場合，食べられるか，建物の強度を増す人柱として使われる（IA, IB, IG1)。女性の場合，教会の鐘の音をよくするために使われることもあるが（IA)，多くはイカルの子供を産むというパターンになっている（IA, IB, IC, IE)。

イカルが意味する「黒い人」に関する記述の大多数は，黒い肌の黒人となっているが，IA のように黒いズボンやシャツをまとうラディーノとするものも若干存在する。チャムーラのイカルに関する話のイラスト（IC）では，黒いマントと帽子，黒い顔のシマロンが描かれている。背中には空を飛ぶための羽がついている。一方，人類学者ハシント・アリアスの編纂したチェナロォの話のイラスト（IB）では，コウモリのような大きな翼で空を飛ぶイカルが描かれ，股間の巨大なペニスが強調されている。これはコウモリー悪魔という邪悪な存在との連関，イカルが異常な生殖能力を有することを暗示している（図2参照)。

IB

IC

図2　イカルの図像

前述のように，チャムーラやシナカンタンの伝説集では，イカルは逃亡黒人奴隷を意味するネグロ・シマロンと訳されている。IC や IE においては，以前チアパス高地にいた黒人のせいで，女性に対する暴行・拉致があったが，黒人が追放されたため，[10] その種の事件も減少したと表明されている。

イカルの悪事自体よりイカルの退治が話の中心テーマとなっている事例もある（IB, IC, ID1, ID2, IE, IF, IG3）。特にIEやIG3は，第Ⅰ章で紹介した「魔物殺害譚」型の典型的な事例といえる。イカルを退治する場合，ナウァルの力が動員される場合（IB, IE, IG3）が多く，この構図はプクフ退治の場合と同じである。銃弾で死なないイカルを焼き殺すというのは，中世の魔女裁判に見られる火刑と共通するキリスト教の中世的な悪魔観の浸透を窺がわせる。

IG2 の場合，イカルは人間を死者の世界に連行する役割を担っており，死者の世界のエージェントと判断してよい。一方，寿命がまだ残っていると子供を救出したナゥアルは，「生命のロウソク（vela de la vida)」を天空で管理している神の使いと見なすことができるだろう。また，ID2とIG3はイカルから法外な財を手にする話で，前章の PB4 と同型といってよい。しかし，その財は，ラデイーノに似ていると描写されるイカルが不当な行為で入手したもので，「大地の主」のような本源的な富に由来するものではない。

IV. ソンブレロン，地下世界の盟主

ソンブレロンは鍔の大きな帽子をかぶった人間という意味である。ソンブレロンの伝承は，チアパス州だけでなく，隣接するグアテマラでも広く知られている。アストゥリアスの『グアテマラ伝説集』の「大帽子の男」では，「大帽子の男」の誕生が語られている（アストゥリアス 1977:71-78)。修道士はゴム鞠をなくした息子に関する相談を一人の女性から受ける。ゴム鞠は悪魔の似姿であるという話を聞いた修道士は，数日前に部屋に飛び込んできたゴム鞠を窓の外に放り出した。ゴム鞠は大きく跳躍し，少年の頭の上で大きく開き，悪魔の帽子になり，こうして「大帽子の男」が誕生したという。

この「大帽子の男」，つまりソンブレロンは，グアテマラの先住民言語では，tzipito，tzipe あるいは tzitzimite[11]と呼ばれている。黒い服，金銀製の拍車のついた綺麗な靴（革靴かエナメル靴）を履き，大きな鍔の帽子をかぶるという。農村部の伝承では，馬やロバなどの家畜と関連させて語られることが多く，たてがみを三つ組みにするなどの悪戯をするという。一方，都市部の伝承では，ソンブレロンは銀製ギターを抱えて歌い，青い大きな眼をした長髪の女性を誘惑するという（http://elsombreron.galeon.com/historia.html)。

ここで記述されている特性はラディーノの大農園主の格好を想起させるが，ソンブレロンの背丈は低いとされている。グアテマラのソンブレロン伝承は植民地期に起原をもち，ラディーノと密接な関係をもつ悪魔として語られている。チアパスのコミタンを舞台としたカステリャノスの小説『バルン・カナン』にも，似たイメージのソンブレロンが登場し，銀製の拍車を鳴らし，動物の頭に凶兆をつける妖怪（espanto）とされている（カステリャノス 2002:67)。

一方，チアパス高地のツォツィル語では，ソンブレロンは jSemet Pixol（コマル鍋のような大きな帽子をかぶる者)，mukta pishol（大きな帽子をかぶる者）と呼ばれる。チアパス州のソンブレロン伝承は，チアパス高地やシエラ・マドレ（Sierra Madre）地区の先住民が太平洋岸のソコヌスコ地方で発

達したコーヒー農園で労働しだしたことと関連しているようである。19世紀後半に成立した中米地域のコーヒー大農園主に多くのドイツ人がいたことは知られているが，ソンブレロンはこうした外国人大農園主の巨大な富の源泉と関連して語られることが多い。

以下，国境隣接地地域の先住民トホラバルの事例とチアパス高地のツォツィルが語る二つの事例を紹介することにする。

事例 SA:ラス・マルガリータス地区エル・プログレソ（El Progreso）

働くことが嫌いな貧しい男がいた。ある時，ソンブレロンがお金を提供しているという噂を耳にした。お金を受け取るには，木曜日ごとに妻をソンブレロンに提供したうえに，死亡時に全額返還という厄介な条件があった。妻はいい仕事を探しに遠くまで行くべきだと言った。一方，教会に通っていた子供は，神父から護身用の聖遺物と小さなメダルをもらい袖に縫いこんでいた。

下の子を提供することで交渉しようと，男はソンブレロンを探したが逢えなかった。ソンブレロンに逢う秘策は，プクフの名を唱え，足踏みし，転げまわることだった。次の木曜日，男は山に行き，言われたとおりにした。やがて，遠から騒音が聞こえ，牧童のような大きな帽子をかぶり，暗い色の馬にまたがった背が高くて細身の男が現れた。ソンブレロンと取引したいと申し出ると，伝言するから希望を述べよと，背の高い男は言った。下の子供を提供すると打診すると，背の高い男は提案を受け，家に帰って四つの大きな箱を作り，少年の服を点検して待つように指示した。

木曜日の夜10時，ソンブレロンがきた。彼が持参したお金を四つの箱に詰め終えると，両親は子供をソンブレロンに差し出した。だが，子供の点検が不十分だと言って，ソンブレロンは立ち去った。次の木曜日，子供を洗ったが，袖のメダルに気づかなかった。ソンブレロンは子供を受け取らず，次が最後だと言って去った。次の木曜日，男は上の子を提供すると言ったが，腹を立てたソンブレロンは姿を消した。翌朝，男は死んでいた。家族が体を埋葬したので，

魂だけが持ち去られたことになる（González Casanova 1998:283-296）。

事例 SB:チャムーラ地区

ソコスヌコのラ・エスペランサ農園では，仕事も楽で金を稼げると騙された多くのチャムーラの人が働いていた。道中には追剥ぎ（jkmabe）も出没し，密林にある農場の労働の条件は劣悪だった。現場監督の人使いもあらく，伐採作業も危険だった。売店での負債は増え，僅かばかりの日当では割が合わなかったので，ひとりのチャムーラの男〔以下男と表記〕は逃亡を決意した。

農園のはずれの丘で夜明けとなったが，暗闇から奇妙な叫び声がした。野獣，それともイカルや長髪の妖怪かと，不安は募っていった。夜が明けて歩きだすと，切り株に数頭の馬が繋がれているのが見えた。男が紐を解こうとすると，大きな声がした。男はソンブレロンと名乗り，一帯が彼の持ち物だと言った。男が農園の悲惨な状況を説明すると，ソンブレロンは道中にあるトウモロコシ畑や湖の場所を教え，お金も持たしてくれた。長い徒歩の旅の末，男は家に着き，さまざまな出来事を妻に説明した。

ドイツ人のハセマンは，この土地が有用材も豊富でコーヒー栽培に適していると判断した。だが，土地はソンブレロンのものだった。ソンブレロンは，知的で体力のある若者ひとりと引き換えに，一帯の開発権を認めた。チャムーラの男がちょうど家に着いた頃，ソンブレロンの騎乗用の獏が死んでしまった。ソンブレロンはドイツ人農園主から約束したものを受け取ることにした。ソンブレロンは父親に変装し，毎週木曜日タパチュラの銀行からお金を運んでいる息子のフェデリコを渓谷で待ち伏せした。ソンブレロンは息子のフェデリコを洞窟に連行し，父親への別れの手紙を書かせた。農園主は農園の仕事を停止し，子供がいなくなった渓谷に赴き，花を捧げた（Calixto Méndez 2000）。

事例 SA で，妻が夫に言った「遠くでいい仕事を探す」という言葉は，遠隔地での出稼ぎ労働を意味する。国境隣接地域のラス・マルガリータス地区の農

民の出稼ぎ先としては，ソコヌスコ地域のコーヒー農園がある。この事例におけるソンブレロンの容貌は，「背が高くて細身の男」で，大きな帽子をかぶり，馬にまたがるとされ，ラディーノの大農園主の容貌を連想させる。

この話のテーマは，第Ⅲ章の事例 PB4 のテーマと同じように，ソンブレロンと交渉することで金持ちになろうとした貧しいインディオの話である。しかし，この事例では，ソンブレロンを出し抜くことができず，結局は死んでしまった。つまり，ソンブレロンは人間の身体や魂を死者の世界に運ぶ存在となっている。このことから，ソンブレロンは地下世界，死者の世界の盟主であるプクフの機能を担っていることが推測できる。

一方，事例 SB で語られるソンブレロンのイメージは，事例SAとかなり異なったものである。ソンブレロンは，貧しい先住民に危害を加える存在ではなく，大農園主の搾取に苦しむ先住民の労働者を救済する役割を果たしている。ソンブレロンは，「大地（banamil），資源（tak'nun），そして山（vitz）の主（yajval）」と自己規定している。そして，地下世界には，数多くの動物，鶏，犬，蛇などのいる農園（finca）があるという。SB の話のある単行本のイラストでは，ソンブレロンの容貌や肌の色にはラディーノを思わせるものはなく，長い髪，見苦しい髭を生やしている。洞窟のシーンでは，ソンブレロンはアルマジロの上に座っている。その回りには蛇が描かれ，背後には彼の騎乗用の獏が描かれている（図３）。このイラストは，先住民族トホラバルを調査してきたルスの次のような情報と奇妙なほど符合している。[12]

図３　ソンブレロン

トホラバルの間では，キキナル(k'ik'inal，黒いものの世界）という地下世界の支配者はニワン・プクフ（niwan pukuj，大悪魔）と呼ばれる。この支配者は，ニワン・ウィニック（niwan winik，大きな人間），ソ

ンブレロンとも呼ばれている。地下世界の盟主は，大きな洞窟に住み，アルマジロを玉座にし，大きな鹿を乗り物とする。彼は山に住む野生動物を管理し，人間による不当な攻撃から保護している。洞窟にはトウモロコシ，フリホール，果物，カボチャの心があり，雷人間（chawuk）が護っている。それゆえ，山の盟主や住処の洞窟に対し，人々は敬意と恐怖をもって接するという（Ruz 1990:63-65）。

ルスによるソンブレロンに関する情報には，これとは異なった特性を備えたものもある。たとえば，ソンブレロンの容姿は典型的なラディーノや農園主の特徴を備え，白人で背が高いとされている。また，植民地期に先住民が騎乗できなかった馬を所有し，上質の大きな帽子をかぶり，銀製のサーベルを腰にぶら下げているとされる。また，キリスト教の悪魔イメージと結びつき，二本の角や長い尻尾をもつとされることもある。こうした特性は事例SAのソンブレロンと合致している。

ソンブレロンに関して，相反する二つのイメージがあることは明白である。ひとつは，事例SAに見られるように，先住民に害悪を加える外部から来た異邦人という否定的イメージである。もうひとつは，事例SBのように，大地や山の盟主として，自然を破壊し，先住民を酷使し，不当な利益を独占する異邦人を懲罰するという肯定的イメージである。両者に共通するのは，ソンブレロンが膨大な富を保持していることである。

V. 大地，開発と人柱

チアパスにおいて語られてきたプクフ，イカル，ソンブレロンという「人を驚かす存在」においては，悪魔の手先という邪悪な存在としての否定的な側面が目立つことは言うまでもない。しかし，それは地下世界を悪魔の支配する邪悪な空間としてとらえた場合のことであり，地下世界を死者の世界，先祖たちが休息する空間としてとらえた場合には，別の肯定的側面が浮かび上がる。こ

のことが明確に現れているのが，事例 SB に見られた「大地の主」，あるいは「地下世界の主」としてのソンブレロンである。

この「大地の主」は，ソコヌスコ地域におけるコーヒー大農園の拡張と関連して語られる。所有者のいない「無主の土地」と思い込み，有用材を切り出し，コーヒー農園を造ろうと考えたドイツ人の前に，ソコヌスコの「大地，資源，山の主」としてソンブレロンが登場する。そして，この未開拓地の開発の許可を与えるのは自分であると宣言する。ドイツ人は地代を支払おうと提案するが，お金に不自由しないソンブレロンが見返りとして求めたのは，一生自分のもとで働くひとりの若者，つまりドイツ人の農園主のひとり息子だった。その一方で，ソンブレロンはコーヒー農園から村に帰ろうとする先住民に多額のお金を与える。貧困でお金が必要という理由で先住民がソンブレロンの住む家や森を破壊し，樹木を伐採する事態を避けるため，お金は渡された。そして，家族に必要なものが賄えたら仲間に分配するように告げている。

「大地の主」は，自分の支配領域を開発しようとするものに対して，一定の見返りを求める。コーヒー農園のための森林伐採などの開発事業は「大地の主」の支配領域の破壊であり，その代償として求められるのは一般的に人間側の生命である。20世紀後半にチアパスで展開された代表的な開発事業としては，パンアメリカン道路の建設やグリハルバ川流域のダム工事などがある。

事例 PA やチャムーラの『創世記』テクスト73において登場する「大地の主」は，どちらとも1950年代のパンアメリカン道路の建設に関連して語られている。前者ではタパチュラからマパステペックへ通じる海岸沿いの道路，後者ではサンクリストバルとトゥストラを結ぶ内陸部の道路が舞台となっている。前者のトレス・ピコス，後者の「鐘の洞窟」という「大地の主」が居住する洞窟の場所は，道路開削の上で難所とされた場所である。特に後者の場合は，標高差千メートルの崖にへばりつくかたちで道路が造られている。こうした箇所で作業員などの死亡事故が起きる蓋然性は高くなる。テクスト73では，シナカンタン地区のナチグの人々が「大地の主」の求める人柱となることを拒否した

ため，「鐘の洞窟」を迂回することになったとされている。

これらの大規模工事に従事した人がいなくなったことを説明する論理として，工事中の事故による犠牲を「大地の主」への人柱の提供と解釈するものを想定できよう。しかし，大規模工事に従事した人が不在になるのは，工事にともなう事故だけではない。むしろ，就労後，ほかの労働現場に移動するなど，働く場が保証されていない出身村へ帰らないことが多かった。

建造物の強度を高めるために人間の生命が必要とされる話は，メソアメリカ全域で採録されている。このような慣習は先スペイン期から存在していた。首を刎ね，頭，流れる血を生贄とすることは，戦争，ペロータ球技，農耕儀礼だけでなく，建築物の竣工などに際しても行なわれた。マヤ地域における工事にともなう人身犠牲の事例について研究を行なったナヘラは，こうした儀礼の目的は，血という生命力で邪悪なものを追放し，新築建造物の破壊を防止するため，大地を提供した神々への感謝のためとしている（Nájera 1987:4,197）。

現在のチアパス地域の伝承では，人柱が必要とされるのは道路やダムなどの大規模工事とともに，教会などの建築物とされることが多い。こうした伝承では，一般的にはプクフやイカル（事例 IG1）が登場することが多い。

事例 EA:テネハパ地区バルン・カナン（Balún Canán）

古老によると，誰も知らないうちに，多くの人が失踪，行方不明になったという。同じことは他の地区でも起きた。その一つがチャムーラである。事件はこれらの地区に教会が建築されたことと関連している。すべては教会の建設がきっかけだった。教会を建設する前，その土台に死んだ人間を置く必要があったからである。それには多くの抵抗があったが，教会が建設されるたびに多くの人間が失踪した。しかし，テネハパでは行方不明となる人はいなかった。その理由は，教会を建設するとき，テネハパの守護聖人が村人が行方不明になることを認めず，保護したからである（González Casanova 1998:29）。

事例 EB:チャムーラ地区

サンフアンはチャムーラで自分の家を築こうとした。周辺にある石や木を利用することにした。彼が杖で石を叩くと，石はひとりでに回転し予定地まで移動した。1日で石を加工し，もう1日で基礎を築いた。石を積み上げることになって，建物を支える人が必要になった。サンフアンは村人全員を集め，希望者を募った。生きたまま建物の中に入ることが必要とされたが，13名の人間が見つかった。壁の中に隙間が造られ，13名は隙間に生きたまま入った。[13] サンフアンが2メートル四方の石に杖で触ると，ひとりでに石は壁の隙間を覆う蓋となった。こうして，彼らの魂は生きたまま壁の中に残ることとなり，教会の建物は完成した（Jacorzynski 2002:209)。

上記二つの事例では，教会の強度を増すための人柱の調達に関与しているのは，プクフやイカルなどの悪漢ではなく，町の守護聖人となっている。しかし，これらの守護聖人は村の固有の存在ではなく，異邦人の持ち込んだ存在である。彼らのために建築される教会は，外部から持ち込まれた開発という点では，道路やダムの建設と同じである。こうした，外部から持ち込まれた開発事業と連動し，プクフやイカルは開発の手先として人柱を確保するために活動するのである。その一方で，「大地の主」という特性をもつソンブレロンは，こうした開発から先住民を防衛する存在として登場することもある。

VI. 90年代後半のコルタカベサス

フレイエルムートがコルタカベサスの噂を聴いたのは，1995年頃だったという。情報源はチェナロォ地区で活動するプロテスタントのキリスト教会（Iglesia de Cristo）に属する牧師だった。彼によると，チャムーラの先住民のなかに，酒類販売や野菜販売，あるいはコルタカベサスの活動によって蓄財したものがいるという。[14] また，ミトンティック地区では，サパティスタや連邦

軍兵士などがコルタカベサスと同一視されていたという。その牧師によると，犠牲者の髪，筋肉や骨も，時計や火薬の材料として利用されるという。そのため，殺害した遺体を高い値段でメスティソに売却しているコルタカベサスは，短期間で蓄財できるという（Freyermuth 2002:190）。

（1） リンチ事件とコルタカベサスの噂

1996年，チアパス高地ではコルタカベサスと関係づけられる暴力事件が起きだす。ゴルサはタクシーや乗合バスの運転手がコルタカベサスとの関連を疑われて巻き込まれたと思われるチェナロォ地区の事件を報告している。

事例 CA:新教徒運転手の拘束事件

1996年，サンクリストバルを本拠とする新教徒で先住民タクシー運転手[15]が，チェナロォ地区のヤブテクルム付近で道路封鎖にあった。運転手と乗客は金持ちと見なされ，怪しい経済活動に従事していると疑われた。二人は拘束され，地区監獄に収監された。運転手はコルタカベサスの活動の詳細を告白した。それによると，悪事に参加するため，何度かパンテロォ方面に連れて行かれたという。しかし，先住民の血が流れるのを見たくないので，森に隠れて朝まで眠り，サンクリストバルに帰る便を待っていたと告白した。州検察庁に引き渡された際，告白は殺害を恐れてついた嘘だと表明した（Gorza 2002:178）。

別の事例では，チェナロォで新たに組織された輸送業者協同組合のメンバーがコルタカベサスとして告発されている。告発者は，新興の協同組合と競合することになる既存の協同組合「フライ・バルトロメー」のメンバーだった。タクシーやコンビ，トラックなどの輸送手段を有する人間がコルタカベサスと見なされ告発されのは，彼らが他者より早く蓄財し，政治的権力も専有するという事態が先住民社会で一般化していることと無関係でない。

1996年の夏，コルタカベサスの嫌疑でリンチ・殺害される事件が，チェナロォ

地区で2件起きている。最初の事件は，チャムーラ，ミトンティック，チャルチウィタンの3名の先住民がリンチされ，殺害されたものである。彼らの遺体はイベルホフの近くの山に放置された。夜中に自動車で移動するという不審な行動が人々の不安を掻き立て，大木で道が塞がれ，彼らは拘束されたようである。2番目の事例は，新聞でも大きく取り上げられた事件である（Freyermuth 2002:190）。

事例 CB: 7名の若者のリンチ殺害，洞窟遺棄事件

8月26日，チェナロォからパンテロォに向かう道路沿いにあるゴミ捨て場と化していたチシルトンの洞窟で7つの遺体が発見された。新聞報道によると，4名の若者は，8月19日に役場町の宿兼酒場でビールを飲んでいたが，別の若者に呼び出され，近くの山に連行された。そこには木に縛られ殴打されていた別の2名がいた。その後，6名は縛り首，または銃で殺されたらしい。

彼らが拘束されリンチされた理由は，コルタカベサス，または魔術の嫌疑とされている。[16] リンチには50名以上が参加し，地区当局の役職者もいたとされる。道で出会った酔っ払いの年配者が彼らをコルタカベサスと見なし，懲らしめるよう人々に呼びかけたという説もある。地域の若者と異なった服装の十代の若者（13－19歳）が酒場でビールを飲み，宿代を払っていたことが，コルタカベサスに違いないという疑いを強めたようである。[17]

こうした挙動不審の人物が，タパカミーノやコルタカベサスと勘違いされ，リンチ・殺害されるという話は，ほかの地区でも採録されている。

事例 CC:サンアンドレス地区ツツベン

ある日，ツツベン村を一台の車が通り過ぎた。車には足をぶら下げた少年がいた。そこへ他の人たちがきて，彼の片足をつかんで車から引きずり出した。車を運転する人がいなくなり，車は松林に突っ込んだ。その様子を見ていた村

の住民は，その少年がタパカミーノだと思い込んだ。実際には，少年はシュルムボ（Xulumbo）村に治療に向かっていただけである。

村人は会合を開き，夜にタパカミーノを探すことになった。少年は傷の治療が終え，シュルムボから歩いて帰っていた。尋問もせず，村人たちは少年を捕まえ，縛り上げた。隣接する村の人たちも彼を殴った。タパカミーノを捕まえるために150人以上が集まり，少年は縛られたまま街道を引き回された。殴られ，服を剥された少年の悲鳴は一帯に響きわたった。死体は全裸で川に投げ捨てられた（González Casanova 1998:125-126）。

チアパス高地の先住民社会における法制度についてシナカンタン地区で調査していたコリエルは，1998年11月下旬，コルタカベサスに関連した住民裁判に出くわした。この事例では，コルタカベサスとして告発された人々はリンチされることなく，共同体の制度に従った裁きを受けている（Collier 2002）。

事例 CD:シナカンタン地区

1998年12月，シナカンタンの裁判所事務所（edificio de juzgado）で，パステの住民によってコルタカベサスとして告発されたエランボーの７名に対する審理が行なわれた。告発者のひとりパステのマリアーノは，11月中旬，集会からの帰宅途中，共同墓地付近で６名に現金を求められたという。翌朝，同じ場所で昨晩の人物と遭遇したので，彼はその人物と話し，身元を確認した。その人物はエランボーの孤児でピストルを持っていた。その人物は，橋を作るのにチャムーラの人間150人の頭が必要であると言っていたという。コンビが通り過ぎたすきに逃れ，ことの仔細を地区当局に報告した。

もうひとつは，12月のグアダルーペ祭の日，６名の人物がコルタカベサスの容疑で拘束された事件である。その事件の直前，大雨で橋や道路が崩れたことがテレビで繰り返し報道されていた。また，道路補修作業中の労働者の一部が，

深夜，シナカンタン地区の当局者を乗せていたトラックに向かってヤジを飛ばす事件もあったという。当時流れていた噂では，橋の復旧に必要な頭を確保するため，コルタカベサスは，死者1万5千ペソ，生者3万ペソの報酬を受け取ったといわれる。[18]

（2） 1990年代後半のコルタカベサスに関するイメージ

1990年代後半にチアパス高地のツォツィルの居住域で流布したコルタカベサスに関する噂について，ハコルシンスキーはシナカンタン（3名）とチャムーラ（1名）の伝統主義者から聴き取り調査を行なっている。これらの証言は，1990年代後半に流布していたコルタカベサスの噂が，プクフ，イカルなどの邪悪な存在に関する伝承と共通点をもちながらも，いくつかの点で大きく異なっていることを示している。

事例 CE:シナカンタン地区

ダム建設などの大規模工事が行なわれる際，コルタカベサスは道路で待ち伏せし，マチェーテで首を刎ね，殺害するという。被害者の頭と内臓をペターテに包み，工事現場に持参し，連邦政府や州政府に雇われた工事責任者などに売却するという。シナカンタンの住民が被害にあうことは少なく，強靭（tzotz）とされるチャムーラの人が被害者となることが多い。シナカンタンの住民が襲われないのは，シナカンタンの人間の頭は雷を呼ぶので，シナカンタンの人間の頭がある建物は落雷で壊れてしまうからだという。[19] コルタカベサスはいろんな民族集団に属し，服装も多様である。また，遺体を工事現場に運搬するため，空を飛ぶことのできるイカルと契約しているという（Jacorzynski 2002:206-207）。

事例 CF:チャムーラ地区

コルタカベサスは，建設される水力発電所，橋，教会，大邸宅などに死体を

売りつける。工事規模によって生贄の数は異なり，魂（chulel）を失っていない遺体（animaetik）を夜間に工事現場に埋葬する。もともとは，ラディーノ（kaxlan）が手先となって，米国に死体を売りつけていた。しかし，近年ではチャムーラの人にもこの稼業に手を出すものがいる。商売に手を染めているチャムーラの人間はコルタカベサスと見なされるようになりだした。

依頼者となるパトロン（ajvaliltike）の大部分は外国人で，資金はメキシコ大統領からではなく，米国やドイツから来ている。犠牲となるのは，先住民の成熟した強い男性，とりわけトウモロコシを食べ，馬でマンゴやオレンジを運搬する農民である。脂肪ばかり摂って野菜を食べないラディーノには力がないので，コルタカベサスに襲われることはない。犠牲者となる人間を探し，遺体を工事現場に運ぶ仕事は，空を飛ぶ能力をもつイカルが担当するとされる。このイカルは黒人やアジア人（chino）の旅行者の格好でうろついているという（Jacorzynski 2002:207-208）。

チアパス高地の先住民族ツォツィル居住域以外でも，コルタカベサスの伝承は報告されている。以下に挙げる三つの事例はハコルシンスキーの研究で例示されているものである（Jacorzynski 2002:228）。

チアパス高地東部の先住民族ツェルタルの居住域にあるテネハパでは，メスティソのコク・ホリル（jk'ok jolil，頭切り）が先住民の首を刎ね，花火やダイナマイトを扱っている別のメスティソに売却しているとされる。犠牲者の頭の骨（bak）は火薬（zi'bak）を作るための原料として利用された。祝祭で使用するため，先住民は完成した花火を祭りのために購入していた。

また，先住民族チョルの居住域であるチアパス州北部のティラ地区では，ツェプ・ビク（tzep bik，首刎ね），チェプ・ホル（chep jol'，頭切り）という悪漢がいるとされる。この悪漢は，北隣のタバスコ州にあるメキシコ石油公社（PEMEX）と契約していた。メキシコ石油公社が開削する油井や橋脚を強固にするために，この悪漢が集めた頭が引き渡されていたとされる。

また，グアテマラ国境隣接地域の先住民族マム（mam）の居住域であるエル・ポルベニール地区では，道路建設時にワヤス（wayas）という悪魔が暗躍していたという。この悪魔は角をはやし，馬や鶏のような足をしていて，パンチョ・ビジャのように銃をもって，大きな帽子をかぶっていた。この悪魔は地区外の人殺し（xiol'xjal）と契約し，人を殺していた。大人は撲殺，子供は絞殺し，首を鋏で切り落としたという。足りない場合は，グアテマラから調達しながら，50ほどの遺体を確保し，ラディーノの技術者（maquinista）に売却した。これらの遺体は道路に埋められ，道路を頑丈にしたという。

これらの事例に共通するコルタカベサスのイメージは，おおよそ次のようなものである。大規模開発工事がある場合，外部の工事関係者と契約しているラディーノが，人柱となる強力な力をもつ男性を殺し，超自然的存在の協力でその遺体を工事現場に埋設するというものである。特徴的なのはコルタカベサスが超自然的な存在ではなく，外部資本の手先として暗躍する実在の存在として明確に認知されていることである。しかも，最近は，先住民の中にもコルタカベサスという邪悪な商売に手を出す者もいるという。

1994年1月のEZLNの武装蜂起以降，社会基盤の整備の遅れを補う名目でのチアパスの地域開発事業の展開は目覚しく，特に舗装道路網の拡充には目を見張るものがある。道路の建設とともに，コルタカベサスの活動は顕在化する可能性をもつ。コルタカベサスは，現金経済の浸透と並行し，共同体に浸透し活動する外部攪乱要素なのであろうか。

むすびにかえて

本稿の冒頭で紹介した1990年代初頭のV・カランサのフクマベに関する話は，先住民から財を略奪する他者として語られたものである。語られるフクマベの行動様式は，チアパスの民話でお馴染みのプクフ，イカル，あるいはソンブレロンにまつわるお話で語られているものと共通している。これらの「人を驚か

す存在」は，人間を拉致し，男の場合は，殺害した遺体を外部に売却し，女性の場合は洞窟に閉じ込め子供を産ます。これらの超自然的存在の行動様式は，彼らが地下世界と関連していることを示唆している。とりわけ，プクフやソンブレロンの話では，「大地の主」として地域の無秩序な開発に抵抗している存在という側面が強調されていた。

一方，道路で人を襲うコルタカベサス（タパカミーノ，アサルタカミーノ）としてのフクマベに関する1990年代後半の言説では，上記の超自然的存在としての特性を窺がわせるものが少なくなっている。コルタカベサスは洞窟に住むこともなく，拉致女性に子供を産ませることもない。空を飛ぶ能力もなく，そうした能力を有するイカルと別途契約して活動するぐらいである。

フクマベと同じく，コルタカベサスが外部からきた勢力と見なされている点は変っていない。しかし，近年では，ラディーノの特権的な仕事であった人柱の確保という事業に先住民も参加しているという。道で人々を襲撃する強盗と誤解されリンチ・殺害される事件に関連して，コルタカベサスが語られることがある。これらの事件の被害者は，タクシーや乗合バスの運転，農産物を取り扱う輸送業に従事する人である場合が多い。彼らは，共同体の基準からみて不可思議な形で蓄財した先住民であり，コルタカベサスと見なされる危険性が高くなっている。同じことは，農業以外の新しい職を求めて共同体から都会に出ている先住民の若者にも当てはまるだろう。

また，1995年以降，チアパス高地一帯で進行している軍事化も，先住民のコルタカベサスの暗躍が語られる背景にあるだろう。軍・司法当局や準軍事組織による住民への嫌がらせ，利害の対立による共同体内部での分裂も顕在化し，誘拐や拉致などの襲撃事件の誘因となっている。開発という名の近代化をチアパスに引き込む主体はもはやラディーノだけではない。一部の先住民も積極的にこうした開発事業の利権にあずかっているのである。

注

(1) この地区は先住民族ソケの居住地域だが，チアパス高地からの移住者も居住する。情報提供者もV・カランサからの移住者と思われる。

(2) 「灰の足」は，焚き火で脚を温め足が汚れている高地の人，「泥と水」は，雨が多く泥水を裸足で歩く低地の人を暗示する。トティクは，われわれの父＝太陽で，神の子，超自然的力を持つ人という特権的な意味をもつ。

(3) アクチャメルは，動物などに変身し，他者に力を行使する呪術師である。

(4) 洞窟の場所は，サンクリストバルとチアパ・デ・コルソ，サンクリストバルとコミタン，アマテナンゴとテオピスカの間などとされている。

(5) イカル・アハウは17世紀初頭のチアパス司教の報告書に登場する。詳しくは小林（2003）を参照されたい。また，オシュチュックの住民は山のひとつをイカル・アハウとして崇拝しているという（Villa Rojas 1990:506)。

(6) トレス・ピコスはV・カランサの伝承にも登場する。そこの悪魔はラディーノのコーヒー農園主に開発を認める代わりに一人息子を要求したという（Díaz de Salas 1995: 315)。この伝承は後述のチャムーラのソンブレロンの話と符合する。

(7) グアテマラ人がチアパスの人を拉致する話はシナカンタンでも採録されているが，拉致した人間を去勢し太らせて油を絞るハラ（Laughin y Karasik 1992:173-177)。この話はアンデスのピシュタコ伝説と酷似している（加藤1998, 細谷2002)。

(8) プクフから身を護るには，仲間と思わせるために赤黒いペニスを見せるとよいとされる。また，肩から黒い棒を下げて歩けばよいとも言われる。

(9) 中南米では農園などから逃亡した黒人奴隷は，キロンボ，パレンケ，シマロンと多様な名前で呼ばれている。

(10) サンクリストバルには18世紀末には約700名の黒人が居住し，ラディーノの使用人として働いていたとされる。

(11) tzitzimite は，ナウアトル語の tzitzimitl に由来することは明白である。ツィツィミトルは首の周りに心臓をぶら下げた骨だけの存在である。

(12) このアルマジロにまたがった図像は，4大陸のイコノロジーにおけるアメリカのイコノロジーの図像と奇妙なほど類似している（落合1993:15-19)。

(13) 13名は，マヤの13名の天空神ではなく，イエスと12使徒だろう。

(14) ここで言及されている話は，1995年にチャムーラで裕福な人物が失踪した事件と関連する。遺体は未発見だが，急激に金回りがよくなり，コルタカベサスと見なされ，殺害されたとされている（Gorza 2002:178)。

(15) この運転手はチャムーラから追放されサンクリストバルに居住する新教徒の組織，チアパス高地先住民地域調整委員会（CRIACH）に属していた。

(16) 新聞報道によると，彼らが麻薬栽培組織と関係ある人物に空手を習っていたことが

関係していたという説もある（*La Jornada*, 1/10/1996）。

(17) 若者6名は，パンテロォ（3名），チェナロォ，シナカンタン，ベルサリオ・ドミンゲス地区の出身者で，住宅を共同で借り，サンクリストバル市の学校に通っていた。彼らは出身の共同体で放送の仕事に関係していた。

(18) 裁定では，彼らはコルタカベサスと認定されなかった。当局者の移動に要した費用2700ペソを7名で分割負担すること，道路封鎖の事態が起きたら再逮捕するという判決となった（Collier 2002:131）。

(19) このため，チャムーラの人は，コルタカベサスの襲撃を避けるため，シナカンタンの人間の格好をするという。

参考文献

落合一泰

1993 「『アメリカ』の発明—ヨーロッパにおけるその視覚的イメージをめぐって」ラテンアメリカ研究年報13。

加藤隆浩

1998 「アンデス高地農民の民間信仰－ピシュタコの社会的意味」，大貫良夫・木村秀雄編『文化人類学の展開－南アメリカのフィールドから』北樹出版，119-136頁。

小林致広

2003 「ボタン・サパタ神話における先住民伝承の取り込み」京都ラテンアメリカ研究所紀要3。

細谷広美

2002 「植民地主義と他者表象－ペルーの「ピシュタコ」を巡る語りの諸相」，山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』，関西学院大学出版会，415-443頁。

アストゥリアス，ミゲル・アンヘル

1977 『グアテマラ伝説集』牛島信明訳，国書刊行会。

カステリャノス，ロサリオ

2002 『バルン・カナン』田中敬一訳，行路社。

Anónimo,

1994 *Relatos Tzeltales y Tzotziles. Lo'il Maxiel,* Diana.

Arias, Jacinto

1990 *San Pedro Chenalhó*, Gobierno del Estado de Chiapas.

Bricker, Victoria Reifle

1973 *Ritual Humor in Highland Chiapas,* University of Texas Press.

Calixto Méndez, Mariano López

2000 *El sombrerón. JSemet Pixol,* UNAM.

Collier, Jane F.

2002 "La solución pacifica de un caso de cortacabezas en Zinacantán" en W. Jacorzynski coord., *Estudios sobre la violencia. Teoría y práctica,* CIESAS/Miguel Ángel Porrúa, pp.123-139.

Díaz de Salas, Marcelo

1995 *San Bartolomé de los Llanos en la escritura de un etnográfico. 1960 – 1961. Diario de Campo, Venustiano Carranza, Chiapas,* Gobierno del Estado de Chiapas/UNICACH.

Freyermuth, Gabriela

1998 "Antecedentes de Acteal: muerte maternal y control natal,¿ genocidio o silencio?" en Rosalva A. Hernández Castillo coord., *La otra palabra. Mujeres y violencia en Chiapas, antes y después de Acteal,* CIESAS, pp.63-83.

2002 "Violencia y etnia en Chenalhó. Formas comunitarias de resolución de conflicto" en W. Jacorzynski coord., *Estudios sobre la violencia. Teoría y práctica,* CIESAS/Miguel Ángel Porrúa, pp.183-204.

Garza, Anna María et al.

1998 "Antes y después de Acteal: voces, memorias y experiencias desde las mujeres de San Pedro Chenalhó" en Rosalva A. Hernández Castillo coord., *La otra palabra. Mujeres y violencia en Chiapas, antes y después de Acteal,* CIESAS, pp.15-36.

González Casanova, Pablo

1998 *Cuentos y relatos indígenas,* vol.7, UNAM.

Gorza, Piero

2002 "El anhelo de conservar y la necesidad de perderse: "cortacabezas" en San Pedro Chenalhó, Chiapas, Mexico, 1996" en W. Jacorzynski, coord., *Estudios sobre la violencia. Teoría y práctica,* CIESAS/ Miguel Ángel Porrúa, pp.169-182.

Gossen, Garry H.

2002 *Four Creations. An Epic Story of the Chiapas Mayas.* Oklahoma University Press.

Guiteras Holmes, Calixta

1965 *Los peligros del alma. Visión del mundo de un tzotzil,* Fondo de Cultura Económica.

Hirales, Gustavo
1998 *Camino a Acteal,* Rayula Ediciones.
Holland R. William
1989 *Medicina Maya en los Altos de Chiapas,* INI/CONACULTA.
Jacorzynski, Witold
2002 "Sacrificio, capital y violencia: Temas simbólicos de la narrativa sobre "cortacabezas" en los Altos de Chiapas" en W. Jacorzynski coord., *Estudios sobre la violencia. Teoría y práctica,* CIESAS/ Miguel Ángel Porrúa, pp.205-232.
Laughlin, Robert M. y Carol Karasik, eds.
1992 *Zinacantán: canto y sueño,* INI.
Molina, Virginia
1976 *San Bartolomé de los Llanos. Una urbanización frenada,* SEP/ INAH.
Nájera C., Martha Ilia
1987 *El don de sangre en el equilibrio cósmico. El sacrificio y el autosacrificio sangriento entre los mayas,* UNAM.
Pérez López, Enrique, prólogo
1997 *Cuentos y relatos indígenas,* vol.6, UNAM.
Pickands, Martin
1986 "The Hero Myth in Maya Folklore" in Gary H.Gossen ed., *Symbol and Meaning Beyond the Closed Community. Essays in Mesoamerican Ideas,* State University of New York, pp.101-123.
Ruz, Mario Humberto ed.,
1990 *Los legitimos hombres. Aproximación antropológica al grupo tojolabal,* vol.II, UNAM.
Villa Rojas, Alfonso,
1990 *Etnografía tzeltal de Chiapas. Modalidades de una cosmovisión prehispánica,* Gobierno del Estado de Chiapas.